

児童相互のつながりを大切にしたい集団づくり（1年次）

— 進んで関わり合い、高め合う学級集団を目指す自治的な活動の在り方について —

中澤 慶子（京都市総合教育センター研究課 研究員）

京都市の平成 29 年度学校教育の重点において、「子どもが未来を創り上げていくために必要な資質」として「主体性」や「社会性」が挙げられている。これらはどちらも、集団の活動の中で育まれていくものである。しかし、少子化や核家族化等の社会的な変化に伴い、子どもたちをとりまく集団である家庭や地域の中でこれらを育むことはむずかしくなっている。そこで、子どもにとって身近な集団である学校での集団活動の充実が求められる。本研究では、子ども同士のつながりを大切にしたい自治的な集団活動をどのように行っていけばよいかについて考え実践した。

第 1 章 幸せに生きていくために

第 1 節 子どもたちをとりまく環境と求められる資質・能力

平成 28 年 12 月 21 日の中央教育審議会答申では「子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向かい合っ

第 2 節 学校における特別活動の意義と課題

様々な集団の中で課題の発見や解決を行い、よりよい集団を目指す特別活動の充実が必要不可欠である。しかし、新学習指導要領特別活動編において「身に付けるべき資質・能力」「学習過程」「各活動の関係性や意義・役割」が必ずしも意識されないまま指導が行われてきたことが挙げられており、さらなる充実が今後の課題である。

第 2 章 進んで関わり合い、高め合う集団づくりをめざして

第 1 節 研究仮説

子どもたちによる話し合いを中心とした STPD サイクルを取り入れた自治的な活動を行うことで、進んで関

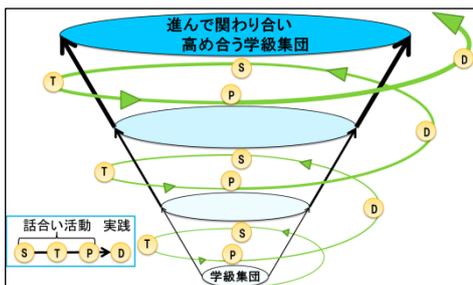


図 1 研究構想図

とした。図1は、本研究の構想図である。

第 2 節 集団自治を意識した意図的・系統的な活動

STPD サイクルを生かした活動は、最初から子どもたちのみの力でできるものではない。教員が子どもたちの実態をしっかりと把握し、その実態に応じた手立てを立てて活動に取り組んでいくことが大切である。まず、子どもたちが学級目標達成を目指して、改めて実態に向き合い課題を明確にしてその改善を考えるという活動を取り入れていく。そして、子どもたちの成長に合わせて徐々に自らの気づきを重視した間接的な支援に変えていく等意図的・系統的な教員の関わり方・支援の在り方がより自治的な集団にステップアップするために必要であると考えた。

第 3 節 お互いを理解し、よさを生かす活動

課題解決に向けて行う子どもたちによる活動においても、お互いを理解し、よさを生かすための体験が必要であると考えた。その一つが、リーダーを輪番で行うことである。それぞれがリーダーを体験していくうちにその大変さやチームが一丸となる喜びに気づき、自分がフォロアー（リーダー以外の役割）になった時に、リーダーを支えていく大切さに気付くだろう。これらの体験がリーダーやフォロアーそれぞれの立場を理解して協力しようという気持ちが育まれると考えた。

第 3 章 子どもたちによる自治的な活動の実践

第 1 節 話し合い活動を中心とした自治的な活動の実践

図2は本研究で実践した活動である。学級全体で話し合い、係活動や集会活動等を実践する活動に各校3回取り組んだ。また、係活動や集会活動でも、話し合いを中心とした小集団での活動に取り組んだ。

B校では、話し合い活動を中心とした一連の活

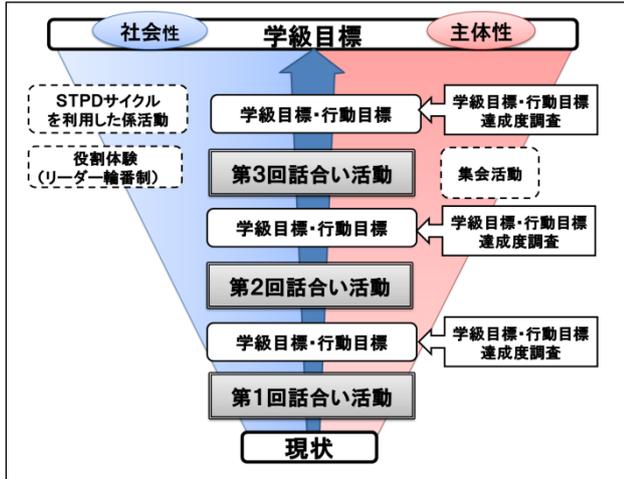


図2 本研究で実践した活動
 動がより自治的な活動になることと、常に学級目標やその達成に向けて立てた行動目標を意識できるような活動になるように取組を行った。

話し合い活動では、教員が進行する部分と子どもに任せる部分を分けて取り組んだ。図3は、3回の話し合い活動の進行割合をグラフにしたものである。

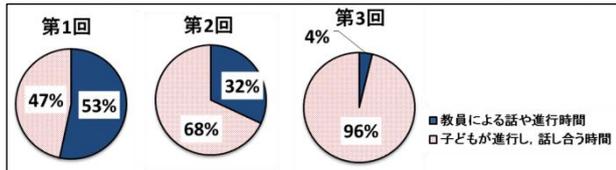


図3 話し合い活動の教員と子どもの進行割合

1・2回目の教員による進行時間は、教員がやって見せ子どもに学ばせた時間である。1回目にやって見せたことは2回目では子どもたちに任せていくというようにステップアップした。3回目の話し合い活動では、教員は必要な時のみ助言を行った。

また、学級目標達成を意識させていくために、振り返りの際には、学級目標や学級行動目標達成度調査を行った。そして、3回目の話し合い活動では、子どもたち自身が学級目標達成度から、課題を見つけ、その解決のために話し合った。図4は、事前に行った学級目標達成度の推移をグラフに表わしたものである。

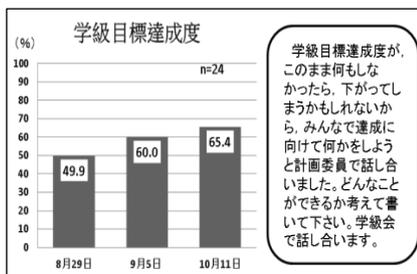


図4 学級目標達成度とそれを受けての議長の提案内容

話し合い活動の前々日に、図4のグラフをから、議長が右側のように提案した。話し合い活動では、クラスのみならず、

クラスのみならず、

しみ会（集会活動）と比べ、内容もより充実し一人一人が楽しむことができるよう工夫されたものとなった。

第2節 係活動における自治的な活動の実践

A校の係活動の実践において、1週間の短期間でめあてや計画を立てて振り返る活動を行った。ここでも係による話し合い活動を重視し取り組んだ。図5はSTPDサイクルを利用した係活動ノートである。

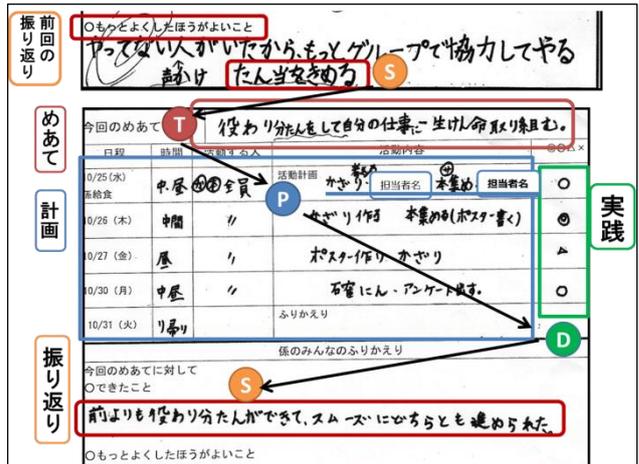


図5 STPDサイクルを利用した係活動ノート

振り返りを基にして活動の現状を見つめ (S)、よりよい活動にする方法を考え (T)、実践計画を立てた (P)。その後計画に従い実践し (D) また振り返る (S) というサイクルを続けた。図5のように前回の振り返りをもとに次のめあてを考えるなど、活動をよりよくしていくための話し合い活動が充実した。

第4章 実践から見えてきたこと

第1節 研究の成果と課題

両校の実践では、SとTに重点を置き、取組を進める活動を繰り返していくうちに子どもたち自身の活動がより充実したものとなってきた。この要因としては、自治的な活動のできる学級集団を目指し、実態に応じて必要な手立てを立てながら活動を継続したからだろう。また、子どもたちの成長に応じて話し合いの場では教員が直接的な関わりを徐々に減らしていったことも自治的な話し合い活動になった一つの要因である。話し合い活動が充実したことで、実践活動の充実につながり相互理解につながったと考えられる。

第2節 新たな課題

限られた時間の中で、このような子どもたちの自治的な活動の時間をどのように工夫・確保していけばよいのか考えていく必要がある。